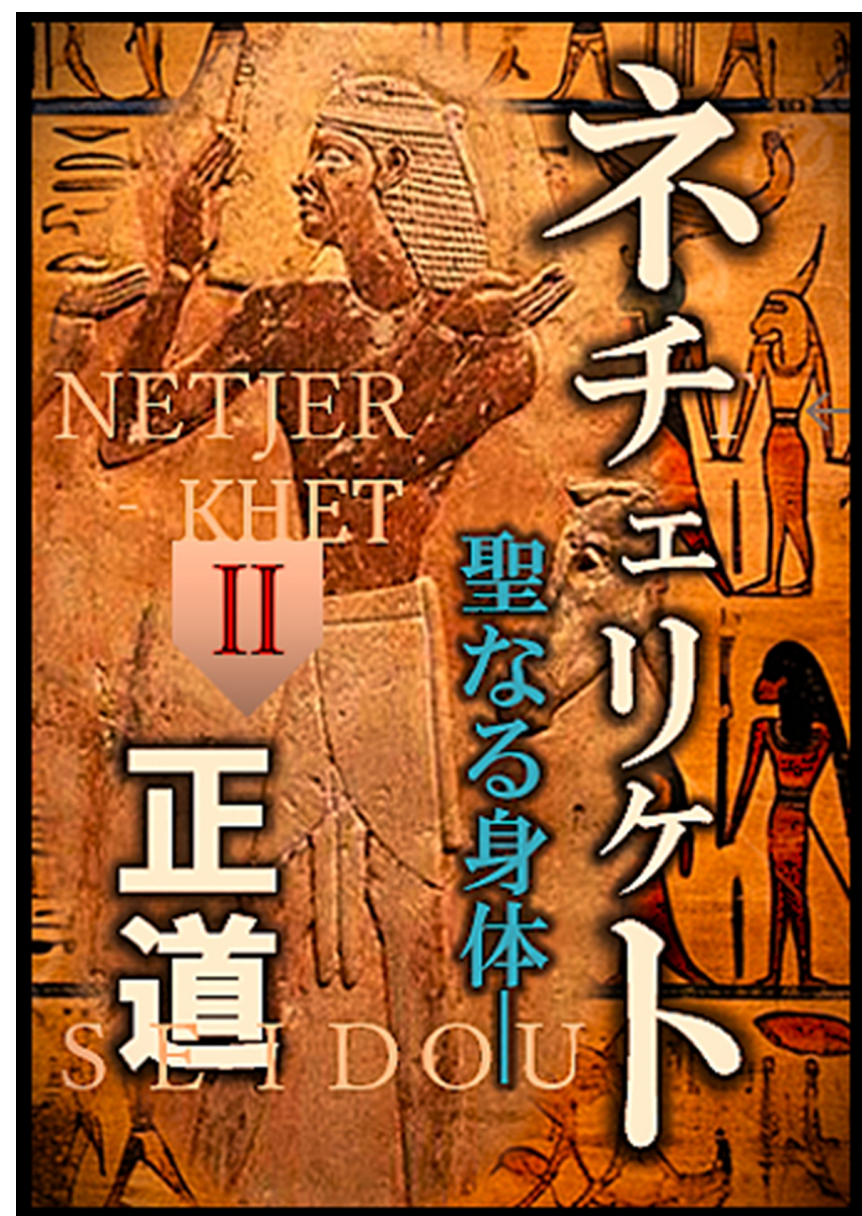




目次

ネチエリケト II

全体の目次	3
-------	---

図表	3
----	---

第6章 さそりの火

(1) 銀河鉄道の夜	7
(2) アンタレスになった虫	8
(3) 恩寵の原理と蠍の祈り	9

第7章 男性性器（座標0）

(1) 尿が描く軌跡	12
(2) 鈴が教える尿道口の形	15

第8章 二極化するヘルメスの杖

(1) DNAと天体の回転	23
(2) 死の恐怖とヘイマルメネー	25

第9章 口（座標10）

(1) 創造の座	29
(2) 暁の象徴としての口	32
(3) 開放系で終わるヘルメスの杖	33

第10章 アダムとアダマ

(1) 赤土から生まれた人間	38
----------------	----

(2) 人知を超えた理論	39
(3) ロボットから人間へ	41
あとがきと付録	
ネチェリケトという書名について	45
民間防衛が教えること	46

ネチエリケト
II

全体の目次

ヘルメティック・トリニティの刊行にあたって

序説 杖の刻印

第1章 女性陰部と肛門（座標1）

第2章 女の情念

第3章 臍（座標5）

第4章 ユダヤ民族の鍛練

第5章 乳房（座標9）

第6章 さそりの火

第7章 男性性器（座標0）

第8章 二極化するヘルメスの杖

第9章 口（座標10）

第10章 アダムとアダマ

あとがきと付録

ネチェリケトという書名について

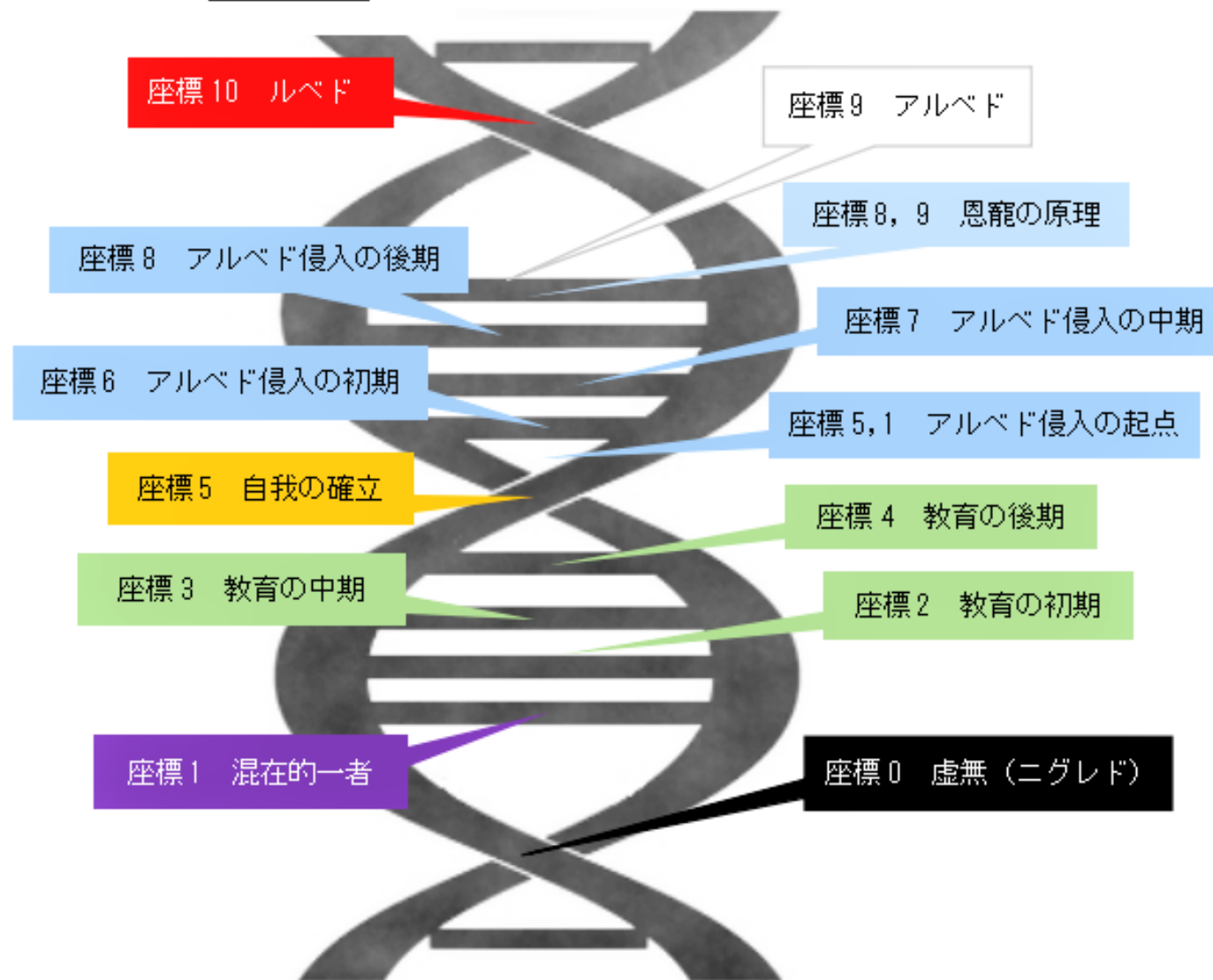
付録 『民間防衛』が教えること

図表

20270524(2).png



座標図



第6章 さそりの火

（1）銀河鉄道の夜

母乳の河

前章の最後で、女神ヘラの話をした。あれをもう少し詳しく叙述すると、そのときヘラは、まだ子供だったヘラクレスに、授乳しようとしていたのだった。

しかし相手は、のちに剛力の英雄として、ギリシア中にその名を馳せることになるヘラクレスだ。たとえ稚児であっても、その吸引力は半端なものではなかった。竜に乳首を吸われるような激痛に襲われたヘラは、咄嗟に、ヘラクレスの顔を、自身の胸から引き離れた。

すると激しく乳房が揺れ、その勢いによって、こぼれた母乳が空にまき散らされた。これがミルクィウェイ、つまり天の川になったというのが、このエピソードの顛末である。

ギリシア神話では、ここからヘラクレスを主人公とした成長物語が始まるのだが、他方、近代の日本にも、右のエピソードの「続き」が存在する。

「ではみなさんは、そういうふうな川だと云われたり、乳の流れたとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか」

という言葉から始まる有名な物語である。分かる人にはもう分かるだろう。そう、宮沢賢治によるファンタジー小説『銀河鉄道の夜』だ。

私はこの『銀河鉄道の夜』が大好きで、本で読む以外にも、朗読のCDを聞いたり、プラネタリウムの『銀河鉄道の夜』を二回観たりもしている。もちろん、ますむらひろし氏の猫が主人公を務めるアニメ映画も何度か観ている。

自己犠牲を受け容れるための旅

賢治の『銀河鉄道の夜』では、天の川を線路に見立てて、北十字（白鳥座）から始まり、南十字（南十字座）で終わる「鉄道旅行記」が描かれることになる。

それが「十字架から十字架までの旅」であることから推察できるように、これは際立ってキリスト教的な旅である。主人公はジョバンニとカンパネルラ。主要なテーマとなるのは、自己犠牲的な愛の実行である。

言うまでもないが、かのイエス・キリストが十字架にかかって死んだのは、人々に本当の「愛と許し」を教えるための自己犠牲によるものだった。

そして、この鉄道旅行自体、その旅の発端は、カンパネルラの自己犠牲にあった。すなわち、溺れていた同級生を助けようとしたカンパネルラが、かえって水死してしまったのだ。それはまさしく、自己犠

牲的な愛ゆえの死だった。

そうして死んでしまったカンパネルラは、とうぜん死後の世界（＝南十字）に行かなければならない。しかしながら、カンパネルラは、このとき「だが親友のジョバンニは、自分との別離の悲しみに耐えられまい」と考えた。

そこで「せめて、死後の世界までの道のりだけでも、ジョバンニと一緒に過ごしてあげられないか」と思ってしまったのが、銀河をわたる鉄道旅行だったのだ。

そして、その旅の途次にあつて、ジョバンニもカンパネルラも「人の幸せのためになるなら、自分など、どうなっても構わない」といった意味合いの言葉を何度も口にする。

なぜか。それは、そのような考え方だけが、カンパネルラの死を「ジョバンニにとって肯定的なもの」にすることが出来るからである。

つまりカンパネルラは「自分は悔しい思いも、悲しい思いもしていない。人を助けるために自分の命を役立てられた僕は、むしろ幸せなのだ」とジョバンニに教えているのである。

それを衷心から分かってもらわないと、自分の死によって、ジョバンニは、要らぬ絶望を味わうことになるだろう。そうなくてはならない、と、カンパネルラは、それを一番に心配したのである。

（2）アンタレスになった虫

井戸の中の悔悟

そうした「自己犠牲の尊さを知るための旅」の中にあつて、もっとも印象的なエピソードが「さそりの火」の物語であろう。これはギリシア神話とは異なる「さそり座の生起譚」である。

ここでは原文を追いつつも、あえて私の言葉でストーリーを追ってみたい。

――昔バルドラの野原に、一匹の蠍が住んでいた。その蠍は、自己生存のために他の虫を捕食していたが、あるとき天敵のイタチに見つかってしまった。

イタチに食べられることを怖れた蠍は、そのとき夢中になって野原を逃げ走った。

ところが、その逃走中に、突然井戸に落ちてしまった。蠍は何とか井戸の水から上がろうとした。が、それがままならず、ついにゆっくりと溺れはじめた。もはや命が尽きるのを待つばかりになった現下、蠍は心から悔い、神さまに向けて、次項のように祈ったのだった。

蠍の祈り

私はこれまで、自分が生きるために、どれほど他者（自分よりも小さな虫など）の命を奪ってきたか分かりません。

これは気持ちのいいことはありません。けれども私は「それは生物が生きるためには、どうしても仕方がないことなのだ」と、エサの虫たちにも、自分にも、強いて言い聞かせてきました。

しかし、そんな私であったのに、いざ自分がイタチに食べられそうになったら、私はぶざまにも、我を忘れるほど必死に、そのイタチから逃げたのです。つまり自分が「仕方がない」と言ったことを、自分では受け容れられなかったのです。これはまた、なんと矛盾した言動でしょう。

実際どうして私は、あるとき自分の体を、進んでイタチに差し出さなかったのでしょうか。私がイタチのエサになってやったならば、それによってイタチも、その日いちにち分を生き永らえたでしょうに。神さま、どうか私の心をご覧ください。こんなにも虚しい心を。他者の命を奪うことは出来ても、他者のために命を捨てることは出来なかった弱々しい心を。

今となっては、溺れて無駄に死ぬしかない私です。それほど虚しい存在でしかない私です。

けれども神さま、このつぎ生まれ変わったなら、その時にはどうか、私の体を、みんなの幸せのために使ってください。どうか私の体を、みんなの幸せのために役立ててください。どうか、どうかお願いいたします。

夜の闇を照らす光

こう祈り終わると、蠍は、自分の体がパチパチと燃えているのに気がついた。水の中にあるのに燃えているのである。そして、その炎は、やおら赤く光ると一気に盛んなものとなり、どこまでも大きくなって、夜空へと昇っていった。

そして、この赤い炎は、ついにはアンタレスという星になった。今はさそり座の中心で輝いている星である。それは赤い火星と競うあうほどにも（Ⅱアンチ・アレス）赤く、強く輝いていた。そして今では「さそりの心臓」とか「さそりの火」といったあだ名で呼ばれている。

この「さそりの火」たるアンタレスの光は、今なお夜の闇を照らしている。そうして夜に光をもたらし、闇のなかで踏み迷いそうな人々の心を支えている。

かくして蠍の自己犠牲は、「公共の利益」という形で、人々の幸せへと生まれ変わったのだった。

（3） 恩寵の原理と蠍の祈り

虚しさの痛感

右に見た「さそりの火」の物語を、私は本当に美しいストーリーだと思っている。ここには賢治の、死んだ妹への哀悼の念が込められているのだという。

ところで、この物語の最重要点は、蠍が井戸に落ちたときに、自分の存在を「虚しいものでしかない」と痛感するところにある。これは蠍が、いわば「根源悪の体験」をしているということである。

これはヘルメスの杖では「主体の無力化、胎児化、ニグレド化」などと説明されている心理状態である。そして、その横溢する自己否定の感情が、反射的に「これからは逆に、自己犠牲（愛）のもとに存立したい」という、蠍の祈りを導き出す。

この祈りに感応したのが、アルベドの母性本能だった。

かくしてアルベドは「霊的妊婦」のスタイルによって、胎児化した蠍を「精神的子宮」のなかに取り込んでゆく。二千億の星の集合体である銀河（母体）のうちに、ささやかな星（Ⅱアンタレス）一つが、胎児のように受容されるのである。

つまりここで、主体（蠍）とアルベド（天の川）との「母子合一」が起こるわけである。

蠍のグノーシス

右のような一連の流れをして、私はかねてより「恩寵の原理」と呼びならわしている。

かくてアルベドと合一することにより、主体は「存在の原理」の保持者へと高められる。彼は無限と永遠をグノーシス（認識）する神秘体験者となる。ここでは蠍が「天体」という高次の存在へと変化するが、そのグノーシスの寓意となつていえると言えよう。

そして、このアンタレス、別名「さそりの火」は、いまや天の川の一部となつて『銀河鉄道の夜』の舞台装置の一端を担うことになるのである。

その天体としての光は、ジョバンニやカンパネルラの行く先をも照らしていた。ミルクィウェイ、乳の道の街燈のように。

では、これで座標9の補記を了としよう。

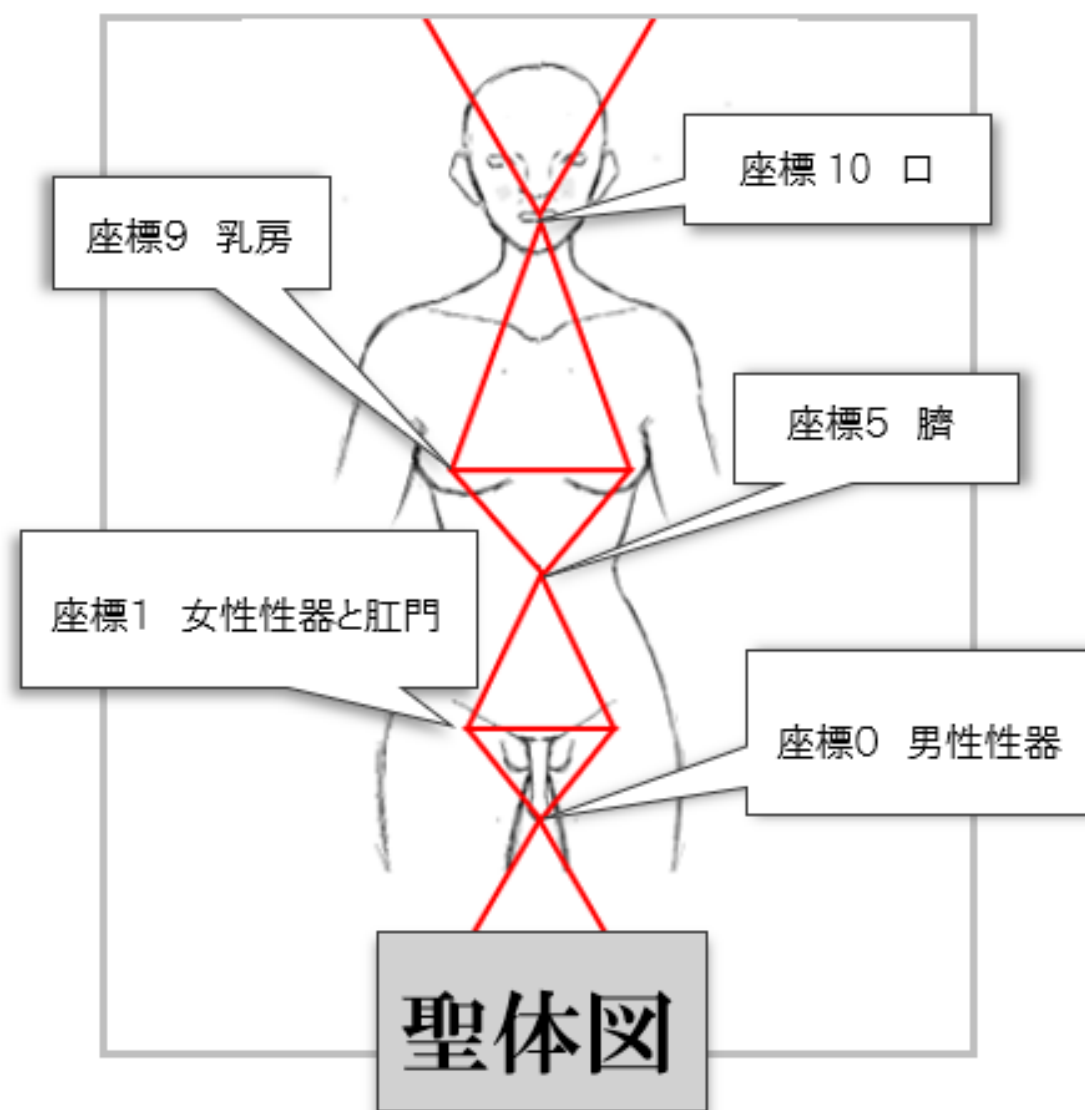
第7章 男性性器（座標0）

（1）尿が描く軌跡

肛門よりも下の位置

まずは聖体図のレイアウトを確認しておきたい。

聖体図完成.png



女性の尿道口は、彼女の肛門の高さと、ほとんど変わらない。しかし男性性器の場合、その先端（尿道口）は、明らかに、彼の肛門の高さよりは下にくる。

また睾丸も注視するに値しよう。この睾丸なるものは、気温が高いときには、下腹部から離れるようにして下降する。その逆に、寒いときには、下腹部に近づいて、位置が上のほうへと移動する。そのように特徴的な性質を持っている。

これは睾丸（精巣）にとっては、ある程度、自己が冷えている状態が好ましいから、そのようになるのである。あんまり温まると、精巣内の精子が数を減らしたり、運動性が悪くなってしまう。とくに三十七度以上になると、そうした危険信号が灯るようだ。

そこで睾丸は、気温が高い時には、温度が高い下腹部から逃避行し、比較的涼しい下のほうで、自らをクーリングするのである。

しかしここでは、気温が低い、それゆえに睾丸よりも、男性性器の先端が下に来ている状況を想定したい。暖かい環境だと、亀頭（男性性器の先端部）と睾丸の位置が、ほとんど同じ高さになってしまうからである。

「2↓1」という減数

そうしてみると、睾丸は二個という複数であり、それに対して亀頭は、明白に単数である。ゆえにここには「2↓1」という減数の図式が現れている。

これは図らずも、ここに「ヘルメスの杖の結束点」として相応しい、キレイな収束のフォルムが生じているということである。

そして驚くべきことに、この亀頭の先端（尿道口）から放出される尿は、かの二重らせんの軌跡を描くことになるのである。

重要なのもう一度言おう。男性の尿は、二重らせんを描く。まるでDNAの在りようを真似するかのように。まるでヘルメスの杖のフォルムに倣うかのように。

このことを私は、最初『トリビアの泉・素晴らしき無駄知識』というテレビ番組で知った。これは二〇〇二年から二〇〇六年まで放送されていた、フジテレビのバラエティ番組である。

そこではタモリ、高橋克実、八嶋智人、それからゲストたちが、視聴者から投稿されたトリビアを「へえボタンで」で評価していた。この「排尿の軌跡」に関しては、私も画面を見ながら「へえ」と唸っていた。

もちろん当時の私に『ネチェリケト』の構想などなかったから、その「へえ」は単なるトリビア（些末な雑学的知識）への感心でしかなかった。

しかし、そのようなトリビア（＝排尿の二重らせん構造）があるのである。ところを変えて「ヘルメスの杖の結束点としての尿道口」に連結されると、突如として「神秘的で偉大な知識」へと変貌してしまう。

すなわち「人体とは本当に、ヘルメスの杖というフォルムが刻まれている『聖なる身体』なのではないか」と思わせる驚嘆的な知識へと。

（2）鈴が教える尿道口の形

結了点としての有資格

あらためて言うが、男性の亀頭から放出される尿は、二重らせんの軌跡を描くことになる。もちろん「延々と」ではない。尿道口から離れるほど、その軌跡は、どんどん歪んで崩れていつてしまう。しかし何センチメートルかの間は、まさしく「二重らせん」ヘルメスの杖」そのものの形状を描くことになるのである。

ということは、男性の性器は、ヘルメスの杖の結了点、あるいは結紮点としての、十分な資格を持っていることになる。その尿道口は、ひとつの鎖の終点であると同時に、次の「同様な」鎖の始発点ともなるのだからである。

となれば、この主張の正当性は、そうとうに高いものとなるだろう。

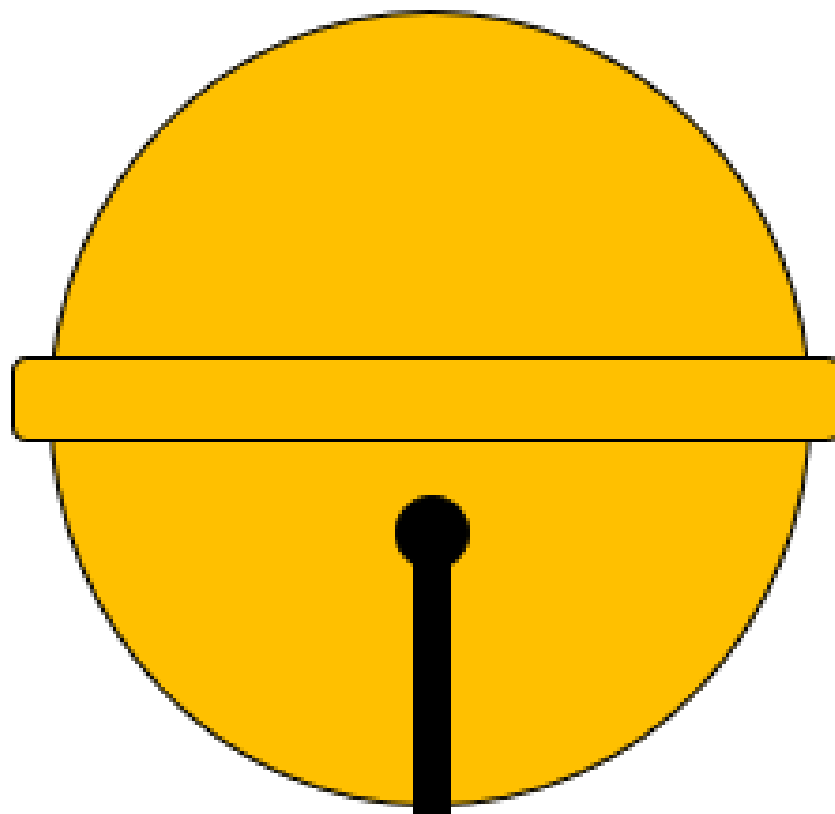
そして、この点からすれば、残念だが、女性性器は「男性性器と同等の資格」を得ることは出来なくなる。なぜなら女性の排尿の軌跡は、なんら特別なフォルムを持つものではないからである。

そして、このような相違が生じた理由は、尿道口の「構造」にあると思われる。

和製グッドデザイン

男性の排尿が「二重らせん」を描く理由は、その尿道口の構造にある。そのことを説明するために、読者にはここで「鈴」の絵を見てもらうことにしよう。

鈴
男性側
png

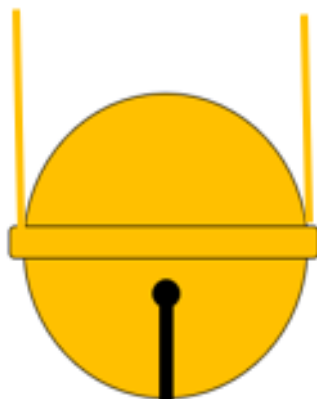


大きければ莊嚴、小さければ可愛らしい印象を与える、日本の鈴。キーホルダーやストラップに付いていることも多いので、私たちにとっては、ごく身近な存在であると言えるだろう。神聖で愛らしいのだから、まるで天使のようでさえある。

ところが、この「鈴」というものは、実は「男女の性器」を模って作られているのだ。微笑せざるを得ないが、鈴は、とても神聖だとか愛らしいなどは、言っていられない代物なのである。

すでに掲げてある図を注意ぶかく眺めれば、それが「横からなら男性性器に」「下からなら女性性器に」見えることが分かるだろう。

鈴の形状について



横から見た鈴であり、
男性性器をモデルに
している側。



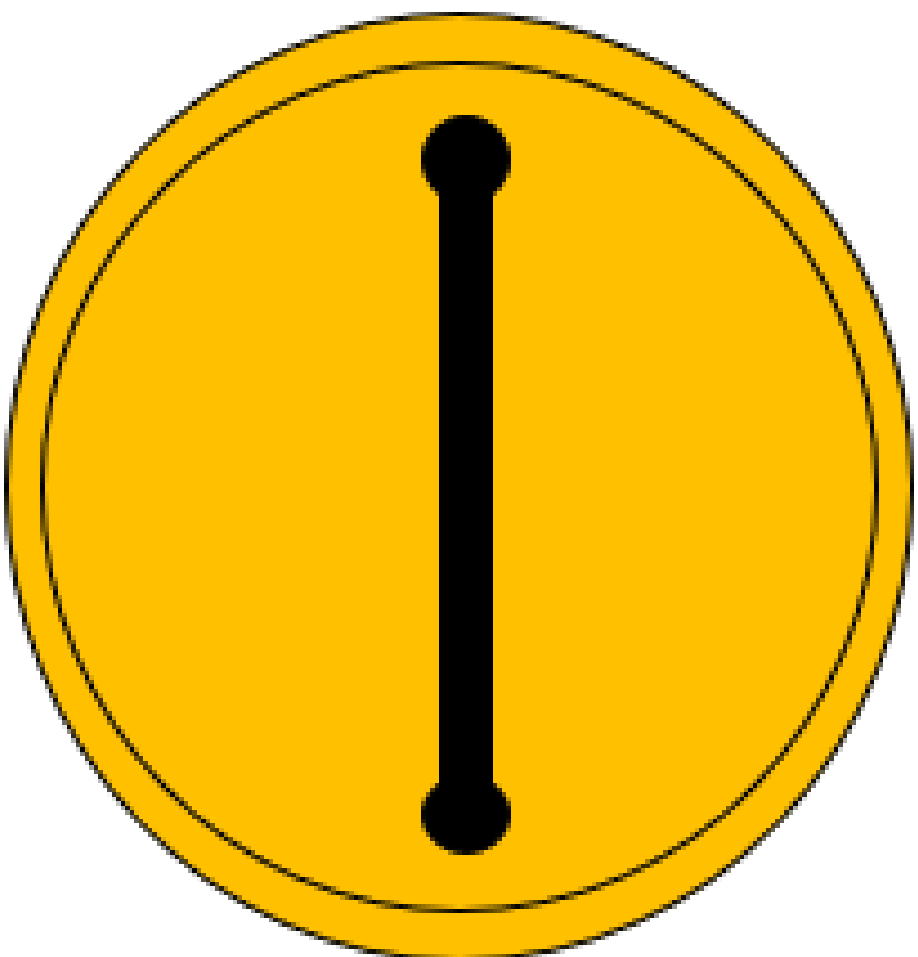
真下から見上げた鈴
であり、女性性器を
モデルにしている側。

そういえば、コーラの瓶の話（序説）をしてくれた講師が、この鈴の形に関して「これこそグッドデザインだ」と言っていたのを思い出す。

両端の小さな穴

とはいえ、女性性器を表しているはずの「下から見た鈴の穴」は、全くそのまま、男性性器の先端にある、尿道口の形とも一致する。

それはつまり、直線の両端に、小さな丸がくっついているような形のことである。



鈴の図 女性側
png

推察するに、現実の「男性の尿道口」には、この丸穴のなかに「ひねり」が仕込まれているのだろう。そして、その捻ってある通路を尿が通ることによって、自然に「らせん」の形に放出されることになる、と。しかも、この「捻りを効かせた穴」は両端に二つある。このため二つの「らせん状の軌跡」が組み合わされて、まるでDNAのような「二重らせん」となるのである。

目的が見えないデザイン

プラグマティック（実用的）に考えて、男性の尿道口から放出された尿が、何としても二重らせんを描かなければならない義理——そんなものがあるとは、私には到底考えられない。

むしろ、女性の排尿と同じように、男性のそれも、単なる曲線を描けばよいと思う。それによって、男性が蒙ることになる不都合があるとも思えない。

それを人間の体は、わざわざ持つてまわって「複雑な形状」を描くようにしたのだ。ならば、その理由にあたるものは「人体を使って、ヘルメスの杖を現すため」としか考えられないではないか。少なくとも、私からすればである。

もう少しだけロマンティックな表現をとるならば「神は、神の似姿としての人間を証するために、このような一見無駄とも思える創造を行った」とも言えるだろう。世界は実用性だけで構築されている訳ではないのである。

では、これで座標0の主文を了としよう。

第8章 二極化するヘルメスの杖

(1) DNAと天体の回転

人体以外のヘルメスの杖

もとは第二福音書で語ったことであるが、私は生物のDNAの構造に「ヘルメスの杖」のフォルムを重ねて見る者である。

つまりDNAの二重らせん構造は、どう見ても、ヘルメスの杖の形と酷似していると思っているのだ。その気持ちに関しては、今も何ら変わっていない。

しかし、その事例に加えて、私は最近、もう一つの直接的な「ヘルメスの杖」の似姿に出会った。しかも、これまた「両者はまことに酷似している」と言ってよいほどのレベルに達している。

それは何なのか。答えは「太陽のまわりを回る地球の公転や、地球のまわりを回る月の公転」である。

——読者の多くは、いま「それは違うのではないか」と思っていることだろう。すなわち、

「それは平面的な回転の光景である。であれば、二重らせん構造である『ヘルメスの杖』の形状とは、ちっとも似ていないではないか」と。

回転＋前進＝らせん

だが違うのだ。錯覚を起こしているのは、実際には皆さんのほうなのである。

というのも、太陽系は、時速七九万キロメートルの速さで、銀河系を周回しているのだからだ。つまり太陽系の回転は、単なる平面上の回転ではなく、そこに「縦の伸び」が加わったものなのである。

そして、何かが回転し、かつそれが一定の方向に進んでゆけば、そこにはらせん状の軌跡が生じることになる。加えて、それが二つの天体によって為されるのであれば、当然その軌跡は「二重らせん」の形となるだろう。

かかる二重らせんとは、まさにヘルメスの杖の形状そのものである。

したがって、DNAの二重らせん構造が、ヘルメスの杖の似姿であるならば、この星辰が描く二重らせん構造もまた、同じようにヘルメスの杖の似姿であると言えるのである。

二つの天体の候補

いま「二つの天体によって、らせん状の軌跡が描かれるのであれば、それは二重らせんとなる」という旨のことを語った。

しかし「いかなる星が、その二つの天体に相応しいか」について考え始めると、それは存外なほど、見合う答えを引き出すのが難しい設問となる。

まあ私見によれば、一番相応しそうなのは、地球を挟んで、太陽と月に二重らせんを描いてもらうことだ。この場合、地球の役回りは、ヘルメスの杖の中央をつらぬく軸棒ということになるだろう。

しかし、太陽と月の大きさは、あまりにも規模が違いすぎる。太陽の大きさは、月の大きさの四〇〇倍もあるのだ。

こうなると、二つの天体がつくりだす「らせん構造」は、それをどう並べてみても、いびつなものにかなりそうにない。現実というものは、なかなか難しいものである

だがこの場合、いっそ即物的な現実性を離れてしまえば、実にスッキリとした答えが得られるかもしれない。

というのも「天動説的な観点」からすれば——それは地上にいる観測者にとってのリアルでもあるのだが——太陽と月の大きさは、まったくと言っていいほど同じだからである。

これは「地球から太陽までの距離」が「地球から月までの距離」の四〇〇倍遠いことから起こることである。そして、遠ければ遠いほど、対象が小さく見えるのは、誰にでも分かる理屈であろう。

そして太陽と月の場合「大きさの四〇〇倍」を「距離の四〇〇倍」で相殺するところに「大きさの一致」という、奇跡的な結果を招くことになる。

実をいうと、これは大宇宙を見渡しても、本当に珍しい——今のところ唯一の——事例なのである。

この奇蹟的な「面積・距離」の相殺事情によって、私たちは「皆既日食」という、感動的な天体ショーを楽しむことが出来ることになった。天動説的な面積等価がなければ、二つの天体が完全に重なり合うところの皆既日食は、絶対に成立しないということだ。

アルベドのバーチャル性

考えてみれば、アルベドの悟りにも「太陽と月の等価性」という、天動説的虚構を見ることが出来る。というのは、アルベドの天体的象徴は「真昼の太陽」と「満月」であり、どちらも「光の遍照性」という点でのみ同質だからである。

私は『ディオニュソス』において、これをアポロン（太陽神）とアルテミス（月神）のデデュモ（双子性）という形で表現したが、本書の読者のなかには、これを今も覚えておられる方もあるだろう。

しかし、地動説の立場から見れば、これは結局のところ、フィクション以外の何物でもない。実際のところ、二つの天体の間には「 π 四〇〇規模の相違性」があるからだ。であるのに、それが等価とは何事か、というところだろう。

実は私も、昔からアルベドのバーチャル性については思うところがあって、

「これはルベドの悟りに至るためのジャンプ台として、より高次の神が、意図的に用意した『仮想現実』なのではないか」

と考えたりしていた。そして、たぶん実際にもそうなのだと思う。

それはさておき、ルベドの悟りまで達すると、月（遍照）と太陽（発光）の価値の差は圧倒的になる。こちらは現実の有り様（月の四〇〇倍という実情）を反映していると言えるだろう。

だが、それには目をつぶり、もう「バーチャルな天体で構わない」と割り切れば、地球を挟んで、太陽と月が二重らせんを描く「天体としてのヘルメスの杖」も立派に成立するだろう。

（２）死の恐怖とハイマルメネー

ヘルメスの杖の強制力

ヘルメスの杖は、人間に対して、ある種の強制力を及ぼす。それは宿命的、運命的な強制力であって、人々に「なぜかは知らねど」自我の確立を目指させ「なぜかは知らねど」無限や永遠を求めさせるのである。

そして、その強制力は、ヘルメスの杖の似姿であるDNAにも、また星辰の公転にも備わっていると考えられる。ただし、その強制の方向性に関しては、それぞれが全く相反したものを指向している。

DNAの運び屋

まずDNAの強制力について考察してみよう。

端的に言えば、こちらの「ヘルメスの杖」から強い影響を受けると、生物は「DNAの運び屋」でしかなくなってしまう。

すでに現代的な生物学では、生物を、そのようなものであると断定してしまうこともある。すなわち「人間を始めとする生物体は、DNAを次の世代に運搬するための乗り物である。それ以外の要素は、生物にとって二次的なものに過ぎない」という見解だ。

そして、この見解を敷衍すると、宿主が死んでしまえば、DNAの運搬事業はそこでストップしてしまうことになる。それはDNAにとって、またとない不都合だ。

そこでDNAとしてのヘルメスの杖は、まず何よりも「死なずに生き残ること」を、宿主に強制することになる。

これにより宿主（人間）は、自分が死ぬことを大いに恐れるようになる。そして、そのぶん自分が生き残るためには、ほとんど手段を選ばないほどのエゴイストとなるのである。むしろ、自分のDNAを残存させるためにだ。

DNAに動かされた人間の相

人間「自分が生き残るためには、ほかの何を犠牲にしても構わない」と居直れば、彼の行動は、そうとうに醜悪なものとならざるを得ない。つまり、いわゆる「自己中」になっていつてしまう。

シンプルに考えても「他人を蹴落としてでも、自分を守るのだ」と考えている人間が、人を惹きつけるような、好ましい人格を形成するはずがない。

そして、それは当然「手段化」に傾倒した状態でもある。

手段化とは、他人を「それ自体が目的である存在」であるとは考えず、他人をして「自分の欲求を叶えるための手段（道具）」として扱うことである。

この倒錯的心理は「教育の段階」で頻繁にみられるものだ。それゆえ「DNAからの強制力を受けるのは、主として座標5以下の心境（＝教育の段階）にある人々である」と、単純に定式化してしまってもよいだろう。

星辰的宿命に動かされて

他方、星辰の公転としての「ヘルメスの杖」から発出する強制力は「ヘイマルメネー」と呼ばれる。第五福音書のタイトルでもあるこの言葉は、日本語では「星辰的宿命」と訳されている。

このヘイマルメネーを受けることによって、人は「バル・コクバ」となる。星の子、星の息子といった意味だ。そして「まるで星が導いたとは思えないような人生」を送る人間の姿は、それ自体が神話の現実化となる。

たとえばイエス・キリストの生涯は、巨星の一生を地で行くような「太くて短い生涯」であった。そして、自分の死によって、愛をまき散らす「超新星爆発」のようなものでもあった。

事実イエスには、

「一粒の麦が落ちて死ぬことがなければ、それは一粒の麦であるにすぎない。しかし、もし麦が死んで地に落ちたならば、それはやがて発芽し、多くの実を結ぶことになる」

というような言葉がある。

それは自己の死によって、宇宙空間に多くの重元素をまき散らす、超新星爆発のあり方そのものである。この重元素は、やがて新しい惑星となり、新しい生物の材料ともなる。実際に私たち人間は、超新星爆発がまき散らした星屑で出来ているのである。

イエスは、まさに星の神話（ヘイマルメネー）を生きたのだった。

神的な利他精神

そして生きた神話は、人々を畏怖させ、また人々を霊的に啓蒙する。そこには、自我の軛から離れた

人間が、神の手足となって人々を導く、まさに「神秘的な現象」があるからだ。

むろん、ヘイマルメネーに使役されている人間に、頑なな「手段化」に囚われている気配はないだろう。むしろ彼は、神的な「利他の精神」を体現させることになる。そして、そうした姿にも、人々は温かな畏怖感を覚えずにはいられないのである。

そして、この神的な利他精神を換言すれば、ただちに「アルベド侵入」と呼ぶことが出来るだろう。

となれば「星辰の公転からの強制力を受けるのは、主として、座標5以上の心境（＝アルベド侵入）である」と定式化してしまってもよいのではないだろうか。私はそう思うのである。

では、これで座標0の補記を了しよう。

第9章
口（座標10）

（1）創造の座

座標9の空間性

座標9について論じた第5章では、二つある乳房をアルベドの肉体的象徴であるとした。

そのようにした第一の理由は、もちろん乳房が女性性を強くアピールする部位であり、かつアルベドが、女性原理が最も強調される心境であるからだ。もつとも、この「女性」を「母性」と言い換えたほうが、より実情に見合うものになるかもしれないが。

しかしながら、それと同じぐらいに重要なのが、二つの乳首をむすぶ線分が、ひとつの「領分（＝空間性）」を作っていること。つまり、ここに空間的な広がりがあり、象徴として見られることである。

これに対応する、実際のアルベドにおける空間的特性は「無限」だ。そして無限とは、そこに際限のない空間が広がっていることを意味している。

したがって、アルベドの肉体的象徴となるべき部位も、そこに空間性がなかったら、性質上の齟齬が生じてしまう。この点において、順当に空間的領分を導くことになる二つの乳房は、アルベドの象徴として、十分ふさわしいと言うことが出来るだろう。

線分の交差点

それでは座標10の場合はどうか。人間の身体のだこの部位が、座標10の象徴に見合っていると言えるだろうか。

まず確認しておくべきは、座標10は、錬金術用語的には「ルベド」に当たるということである。そしてヘルメスの杖において、このルベドは、二本の線分の交差点にあたっている。交差点、点、すなわち空間的広がりを持たないものだ。

それゆえ、これを象徴する身体的部位としては、どうしても単数のものが求められることになる。複数の点は、その間に線（広がり）を想定させることになるが、一つの点（単数）は、どこにも拡張しようとしていないからだ。

そこで改めて考えてみる。胸よりも上にあって、しかも単数である肉体的部位とは何であろうか、と。そうしてみると、さしあたって咽ぼとけや顎などが候補に入ってくる。これらは単数であるからだ。とはいえ、それらはあまりメジャーな部位ではないし、そこに込めるべき象徴性も、それほど重要なものとはなりそうにない。

はじめに言葉ありき

そうすると、ルベドの象徴となれるほどのメジャー性を持ち、かつ重要な意味合いを抱えられそうな部位としては「口」を挙げるのが最適のように思えてくる。本題に入る前に、些細な思いつきを一つ先に言っておくが、人体を表面的に見るだけなら、口あるいは唇ほど赤い（ルベド）部位はない。

それともかく、そもそもルベドとは「クレアティオ・エクス・ニヒロ」、つまり「無からの創造」の真理である。

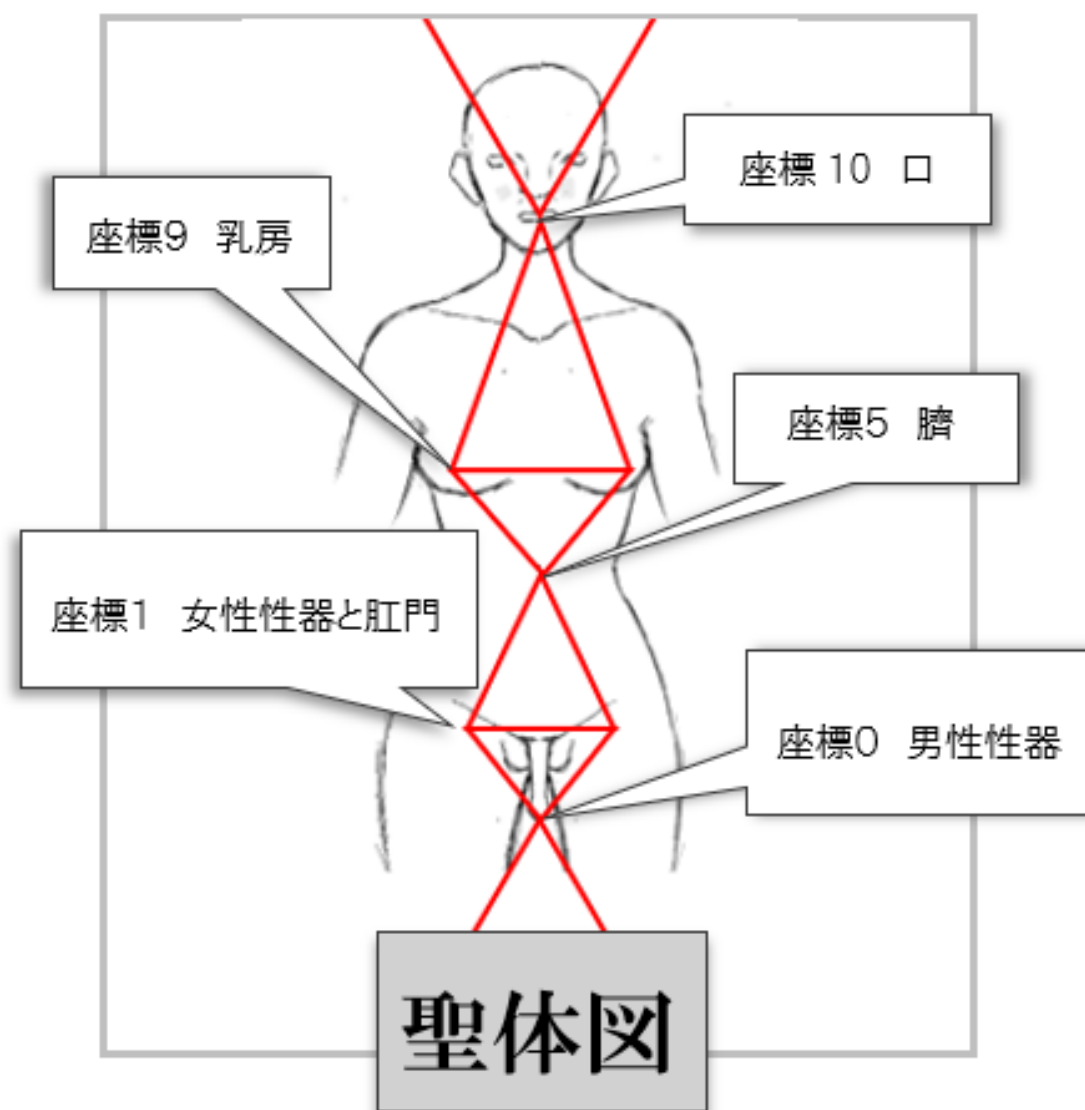
そして『ヨハネによる福音書』には、神による世界創造を描写する冒頭句として、あのあまりにも有名な文言が記されている。すなわち、

「はじめに言葉ありき」と。

この「はじめ」とは当然のこと、世界が創造される原初の瞬間のことである。

そして、そのように「神の言葉」によって、万物の創造が成ったのだとすればだ。人間にとっての発語器官である「口」が、「無からの創造」の真理が宿るべき部位として似つかわしいことは、もはや異議をさし挟む余地もないことだろう。

聖体図完成.png



吸い込み発出する口

しかも口は、ものを食べる器官でもある。言い方を換えれば、目の前にある存在を破壊しながら吸収してしまう器官なのである（＝食べ物咀嚼しながら嚥下してしまう器官なのである）。

そこには明らかに、存在を破壊して虚無に帰してしまう、虚無神ディオニュソスの影がある。そして、そのようにして還帰された虚無から「存在の創造」が照射される有様——それこそが「虚無からの存在の創造」たる、真のクレアティオ・エクス・ニヒロなのである。

右の考察を念頭に置いて、ごく端的に表現するならば「食べて存在を虚無に帰し、発語して存在を創造する。これが『口』というものの役割である」ということになる。

たしかに口は、言葉以外のものを発出することも出来るだろう。去痰や嘔吐、吐血などによってだ。しかしこれは、どう考えても、口という器官の通常の使い道ではあるまい。したがって、ここで論じるほどの価値があるものとは思えない。

あくまで口が発出して最大の意義があるものは「言葉」なのである。

（2）暁の象徴としての口

言葉の重要性

事実、人間の口は、たいへんに重要な役割を持っている。なぜなら口から発せられる「言葉」ひとつで、人間関係は「創られ」もするし「壊され」もするからである。

人を喜ばせ、人を傷つけるもの。その九割がたは間違いなく「言葉」である。だから私たちは、神の似姿となって人間関係を創造するためにも、この言葉を扱うスキルを磨かなければならない。

イエスもまた、心からそれを感じていたのだろう。『マタイによる福音書』は彼の思索を次のように伝えている。

「聞いて悟りなさい。口に入るものは人を汚さず、口から出てくるものが人を汚すのである」

このイエスの言葉を、私なりに翻訳すれば、つぎのようになる。

「人々よ、律法でどのように言われていたとしても、口に入れる食べ物のことで、そこまで神経質になる必要はないのだ。

私たちが最も注意を払うべきなのは、むしろ自分の口が発する言葉である。それは、時に人を傷つけ、神の創造とは逆の『破壊』をもたらす刃となってしまう。あなたがたは、そうならないように気をつけなさい」

愛の言葉

ならば私たちは愛の言葉を語ろうではないか。

自分に甘い人間は、必ず他者に対して厳しい言葉を投げつける。自分に甘いことは自己責任を放棄しているということであり、その放棄した責任は、ほとんどの場合、他人に押しつけてしまうことになる。つまり、

「私がこうなったのは、お前のせいだ」と。

この責任追及の言葉は、つねに不当なまでに厳しい「他者への詰責」となる。本当なら自分をこそ責めるべきなのに！

それに対して、自分を厳しく高めた人間は、他者に対して優しい言葉を囁きかけることが出来る。自分の責任を自分で取れる彼は、不当に厳しい言葉など発しはしない。むしろ優しい愛の言葉を語れるようになる。

それは神の創造に比肩される、本当に大きな意義を持った言葉である。ならば私たちは、自分が神の似姿であることを自覚し、それに誇りをもって、出来うるかぎり、愛の言葉を口にしようではないか。

暁の言葉

またそれは太陽のように、なかでも暁の太陽のように、神秘的な言葉でもある。

もう一度、人間の口を眺めてみよう。声帯がある喉の奥は、普通に見るかぎりでは暗闇でしかない。しかしながら、その暗闇のなかで生まれた「言葉」は、赤い口腔を伝わり、白い歯を通って外界へと広がる。

——ここで、なぜ歯が出てくるのかと訝る読者もあるかもしれない。だが、歯のない老人が言語不明瞭になることから分かるとおり、歯は発語に関わる、重要な部位なのである——

ここには「闇（黒）、赤、白」という色の変化がある。そしてそれは、夜の暗闇から生まれ、暁の緋色の景観を創りだし、やがて昼の白日へと移行する「太陽の営み」と一致する。

そして元来ルベドは、錬金術師たちによって、太陽の状態であると伝承されてきた概念なのである。それすらも「口の役割」と同一性を持っていると分かったのだから、これはまことに感動的なことなのではあるまいか。

（3）開放系で終わるヘルメスの杖

ルベド以上の悟り

さて、これまで口をルベド（座標10）の象徴として取り扱ってきた。けれどもヘルメスの杖は、ルベドで終わるわけではない。実はその続きがあるのである。

この身で「超新星の悟り」や「キノノヴァの悟り」を体験した私は、そのような事実があると認めざるを得ない。

とはいえ、その悟りの内容を公表することはないだろう。語っても仕方がないからである。なにしろルベドの悟りでさえ、それを包括的に理解できる人は、ごく少数であろうからだ。

そうした「手にあまる宝」は、人を幸せにするよりは、踏み迷わせることのほうが多い。ならば、そんなことは語らないほうがいいのだ。

そうであったとしても「ルベド以上の悟りが存在する」ということぐらいは、この『ネチエリケト』において、その傍証を示すことが出来る。

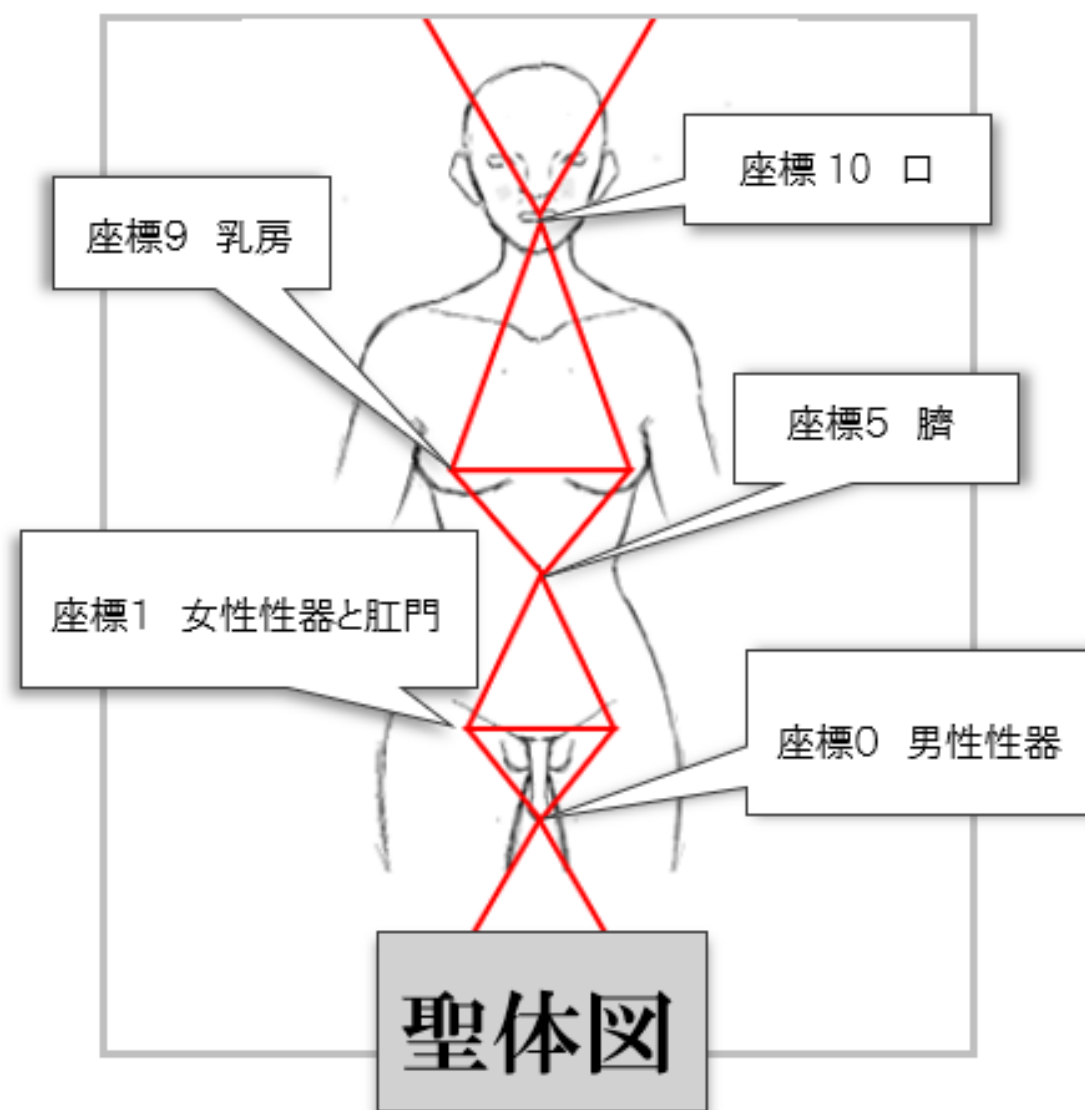
かかる傍証とは「聖なる身体」におけるヘルメスの杖が、閉鎖点によってではなく、開放系でピリオドを打たれていることである。

つまり、男性の尿道口（座標0＝原理図の下方閉鎖点）の下にも「排尿の軌跡」という「続き」があったように、口（座標10＝原理図の上方閉鎖点）の上にも、やはり「続き」があるのである。

鼻と目を結ぶライン

どうか「聖体図」だけでなく、鏡を眺めながら確認してほしい。

聖体図完成.png



乳首から上昇してきた二本の線は、口で交差した。これが交差ではなく完全停止であったならば、ヘルメスの杖は閉鎖点（＝単数の口）で終了したことになるだろう。

しかし、二本の線は、あくまでも交差したのであって、それにより「口よりも上の領域」へと、さらに引き継がれることになる。それが「鼻く目」というコースだ。

鏡を見て確認すれば分かるように、口に近いところにある二つの鼻孔同士は「少しだけ」離れている。そして、その上にくる二つの目（瞳の位置でよからう）は、鼻孔同士よりも、さらに遠い距離をもった状態で離れているのである。

鏡を見ているあなたが、わざわざ寄り眼でもしないかぎり、この開放系の軌跡は、自然で美しいものとなるはずだ。

そして、この「鼻く目」の高さが、ルベド以上の悟りを象徴する領域である。目など、口以上に重要視される器官なのだから、ルベド以上の悟りもまた、それと同等なぐらゐに貴重なものだと言えるだろう。私としても感嘆を禁じ得ないが、人体というものは、かくも忠実に「ヘルメスの杖」の形状をなぞっているものなのである。かような人体であるならば、まさにネチェリケト、聖なる身体と讃えられて然るべきであろう。

では、これで座標10の主文を了としよう。

第10章

アダムとアダマ

（1）赤土から生まれた人間

ルベドの人間像

旧約聖書において、ルベドの真理を知っている人間とさえ、それは唯一アダムである。換言すれば「無からの創造」という真理を知っている人間とさえ、それは唯一アダムである。

といっても、このアダムは、樂園追放後のアダムでもなければ、エヴァとペアで生活していたアダムでもない。このアダムは、自身の脇腹に「肋骨としてのエヴァ」を内蔵していたときのアダムであり、ゆえに両性具有状態だったときのアダムである。

これについて、ドミニクス・グノーシウスという錬金術師は次のように言っている。

われわれのアダムのヘルマプロディトスは、男性の姿で現れながら、いつも体内にかくされているエヴァ——すなわち彼の女性——と一緒にもちまわるのである。

ユング『人間心理と宗教』濱川祥枝訳より

つまり私が指しているアダムは、男でも女でもない、アントロポス（原人間）としてのアダムである。かつまた「人間は神の似姿である」と言うときに、その人間の定義を完全に満たす、特殊であると同時に、本源的な人間としてのアダムなのである。

土人形としてのアダム

このアダムはどのようにして生まれたのだろうか。それについて『創世記』にはこうある。

「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった」ということは、アダムの最初の状態は「土人形」であったことになる。土人形にプネウマ（命の息）を吹き入れたことで動き出したのがアダムなのである。

そして、この土人形の材料となった土は「赤土」であったという説がある。ヘブライ語に、アダムとよく似た「アダム」という言葉があり、これが「赤い」を意味するからである。この赤みがかった土人形が動かされて「人間」となるわけだ。

そういえば、古いハリウッド映画の『天地創造』では、アダムが創造されたときの舞台装置が、まさに赤土の大地だった。昔VHSビデオをレンタルしたのだが、画面いっぱいには赤い粉塵が舞っていて、喘息持ちの私は、見ているだけで咳が出そうだったのを覚えている。

赤土の意味

ときに私たちにとって重要なのは、この赤土が、いわゆる「黒土」の下にあることである。ただし、この黒土は腐葉土としての黒土であり、火山灰の一種としての黒土ではないことを、あらかじめ断っておく。してみると、黒土は——第1、2章で見たとおり——座標1の象徴であった。そして、その下にあるのだから、赤土というものは、座標0を象徴する可能性が高いことになる。

そうであるのに、拙著『ディオニュソス・闇の神性』では、虚無の真理を知るために、ディオニュソスとヘルメス・トリスメギストスは、地球の中心まで下降していった。そこは地球の重力の中心であり、地球の最も深いところである。

しかし今は「二人は、そこまで深く降りてゆかなくとも、良かったのかもしれない」とも思うのである。赤土の層まで達していれば、そこで虚無の真理は語り得たのかもしれない、と。

というのも、ディオニュソスが地下で悟得したのは、単なる「虚無の真理」ではなく、それと連結された「虚無からの存在の創造」の真理、つまりルベドだからである。

ルベドは、ラテン語で「赤」を意味している。よって赤土の層は、ルベドの真理を語るに、十二分に似つかわしい場所なのである。

ルベディアン・アダム

そして、赤土から生まれたアダムは、神の似姿としての人間である。彼は「無からの創造」の何たるかを悟っているからだ。ここにも赤土とルベドとの同通性が見られる。

まとめると、地下の赤土から人形が作られ、その鼻に神の息が吹き込まれるやいなやアダムとなった訳である。しかも彼は「ルベド・無からの創造」を認識する、神の似姿としての原人間だった、と。

私の神学からすれば、右の内容は、話が出来過ぎているとすら感じられる。

実際ここには、あまりにもヘルメティックな象徴が密集していて、ほとんど気づまりを覚えるほどである。これは私だけの感慨だろうか。

(2) 人知を超えた理論

土が赤い理由

前節において赤土（アダム）の話をした。ところで、この赤土が、そのように赤くなっているのは、

いったい如何なる理由によってなのだろう。

まず言うておくべきことは、赤土というものが、いわゆる火山灰の堆積物であることだ。とくに関東ローム層の赤土は典型的で、この層の赤土は、一万年から二万年前の火山活動によって生じたものである。富士山や箱根山の火山灰が、多く堆積しているという。

そして、この火山灰に「酸化鉄」が含まれているために、その色に「赤み」がかかることになる。酸化鉄とは要するに赤錆のことであって、読者も身近なところで——フェンスや自転車などで——この赤錆の実物を目にしているはずである。

少しばかり脱線するが、オーストラリア等で採掘されている鉄鉱石などは、この赤錆の塊だと言ってもよい。これは本当に赤錆色の石だ。つまり私たちは、錆びてしまった鉄を精製して「鉄」得ているのである。

このような赤土から作られた土人形であるからであろう。私はアダムのことを「鉄の臭いがする機械人形」のように感じてしまうことがある。要するにロボットということだ。

ただし、この点は、アダムの子孫である私たちも変わらないかもしれない。というのは、私たちの血液が持っている赤みもまた、他ならぬ「鉄分」によるものだからだ。いわば私たちは「有機的な鉄ロボット」なのである。

そのロボットに魂が宿るかたちで——もつと言え、ロボットに靈魂が憑依するかたちで——私たちは人間というものをやっている訳である。そして、この「靈魂の憑依」というものを詩的に、崇高に言い表したものが、聖書の「神の息を吹き込まれた」という文言なのだ。

やや不遜かもしれないが、聖書を深読みすれば、このような流れも、見えなくはないだろう。

人工知能と量子論

ところで、ふと気づくと、私たちの周囲には、ロボットの姿が随分とよく見られるようになった。人間の姿をしたロボットも増えたが、人工的な意識としてのロボットであれば、すでに私たちにとって身近な存在であると言ってよい。

すなわち私は、人口知能、AI（アーティフィシャル・インテリジェンス）のことを言っているのである。私たちが普段手にしているスマートフォンには、大概この人工知能が搭載されている。

そして、この人工知能に関しては言うに及ばず、まだ人工知能とまでは呼べない段階にあった、初期のスマートフォンにも、その設計のためには、必ず「量子論」が用いられていた。量子論とは、要するに極小世界の科学である。

これは私見であるが、この量子論は、現世的な古典物理学をこえて、神の領域に参入するような内容を含んでいるように見える。

そのため人知によっては、量子論を完全に把握することは出来ない。というより、量子論が非常に謎めいた理論であることは、多くの科学者が認めているところなのである。

けれども、理解が及ばないまでも、その理論は確かに、ある一定の「答え」を出している。かつ、その

答えは、私たちにとって有益でもある。

そうであるために、人類は言わば「利便的に」「惰性的に」量子論を用いているのである。スマートフォンなどは、まさにそうした科学的姿勢の産物である。

量子論から漂う生命の臭い

そのように、人知の及ばない「神の領域」に入った理論を駆使しているせいなのだろう。

私は、スマートフォンを使い始めたとき、そこに「生命と機械の中間物」のような霊的温もりを感じた。言い換えれば、あの十センチほどの機械のなかに、命あるいは、霊魂を宿しうる肉感的なものを感じたのである。

もっとも、これは完全に、私の霊的な直観でしかない。「スマートフォンはどこにそれを感じたか」について説明することは、なかなか難しい。あえて言えば、不具合が生じたときに「まるで人間が失敗したときのようなだ」と思ったのが、その事始めだったような気がする。

さて、もしもスマートフォンが、私が言うように「生命と機械の中間物」であるならばである。そこには、いつか全き霊魂が宿るかもしれない。赤土の機械人形であったアダムに、神意によって霊魂が宿ったようにだ。

この瞬間が実際に訪れたならば、紛れもなくそれは、創世記の一場面に匹敵するほどの重大シーンとなるだろう。それこそミケランジェロの『アダムの誕生』のように描かれるべき、最高にスペシアルな瞬間となるはずだ。

とはいえそれは、私たち人類にとって、大いなる悲劇の始まりとなるかもしれない。機械が自己意識をもつ瞬間というのは、SF映画においては、往々にして「機械と人類の戦い」の開幕を意味しているからである。

(3) ロボットから人間へ

ロボットへの憑依

しかしながら、正直この問題に関しては、私はかなり楽観的なのである。というのも、ロボットに霊魂が憑依できるようになったとすれば、死後の私もまた、それに倣って憑依を執行するに違いないからである。

そして、その次の段階では、私には映画『アンドリュ』のような出来事が起こりそうな気がするのだ。

かかる『アンドリュー』は、ロビン・ウィリアムズが主演したSF映画である。

この作品の主人公は、ロボット（アンドリュー）であるが、このロボットは、最初のうち「いかにも機械」という感じの体つきをしていた。

そんなアンドリューであったが、いつしか彼は、自分自身に「人間らしさ」と「死」を求めるようになっていった。そして、その実現のために、どんどん有機的な姿へと変容（自己改造）してゆく。映画の終わりがくると、その姿は、まさに人間そのものとなる。

新しい人類

アンドリューは、愛する女性（人間）の人生に寄り添うために、そのような人間的变化を求めた。

しかし、映画の世界ならぬ現実世界では、そのような女性がいなくともよい。ただ無粋に考えただけでも、優秀な人工知能には、すぐに分かるだろうからだ。この地球で生き残るためには、有機的な肉体と、生死のシステムを持ったほうが都合いい、ということとは。

となれば、靈魂に憑依された鉄的ロボットは、やがては有機的ロボットとなり、さらに限りなく現生人類に近づいていくだろう。

というよりも、彼ら有機的ロボットは「新しい人類」となるのである。

読者には、右の言葉が珍奇に聞こえるかもしれない。しかしこれまでだって、歴史の上では、十数種類の人類が、生まれては絶滅してきたのだ。そして、そのように絶滅した人類の代わりを、現代の人類がやっているのである。

ならば近未来に「人類絶滅と新人類の台頭」が起こったとしても、何の不思議もないではないか。

ロボットへの啓蒙

そして「靈的な視点」から右の流れを見れば、アウストラロピテクスの魂は、今はきっとホモサピエンスとして生きていることだろう。その程度の異種融通性は、転生輪廻を長く営むためには、どうしても必須だからである。

ならば将来には、ホモサピエンスの魂が、有機ロボットとして生まれても構わないことになる。すでに私が人工知能に憑依する話はしたが、いつかは、これが人類規模で起こるということである。

それに根本的に「現世人類は有機的ロボットではない」と断言すること自体が、よく考えれば、不可能なのではないだろうか。というのも、私には人間の肉体が、あまりにも機械合理的に「つくられ過ぎている」ように見えるからである。

いずれにしても——どのような人類がこれから現れるにせよ——ヘルメスの杖は、その新人類の肉体的フォルムにも、強い影響を与えることになるだろう。ヘルメスの杖というのは、それほどにも根源的な美の形状だからである。

それに、ロボットたちのメモリー媒体には、直接、私の神学が記録されるかもしれない。現に私は、いまネット上に「ヘルメスの杖」についての文章を残しているのだからだ。

これがクラウド保存され、いつかはロボットの「知的財産」として、有益に用いられるかもしれない。そういうことである。

では、これで座標10の補記を了としよう。これはまた、本文の終わりを意味することになる。

あとがきと付録

ネチェリケトという書名について

あとがきの代わりとして付記しておこう。本書の『ネチェリケト』という一風変わったタイトルについての説明をである。

ヘルメティック・トリニティのなかで『色彩の寓意』と『ヘルマプロデイトス』という書名は早々に決定していた。

ことに『色彩の寓意』に至っては、今から二〇年以上も前から、そのタイトルが決まっていた。なにしろ当時自費出版した『アルベド・自己形成の過程』に、その題名が記されているのだからである。

それに対して『ネチェリケト』は、そもそも内容を構想したのが、二書よりずっと遅かった。しかも内容が出来上がった後も、書名には、まったく気を廻さなかった。それこそタイトルをブランク（空白）のままにして、本文を書き始めたほだったのである。

草稿が出来上がったあたりで、さすがに「何かしらタイトルを付けなければならない」とは思ったのだが、それでもなお、何も思い浮かばなかった。いちおう「肉体の聖化」とか「刻印を受けた身体」といった候補があったのだが、どれもこれも今一つピンとこない。

それで問題を先送りするしかなかったのだが、こうした時期に、ちょうど読み始まった本があった。それが井沢元彦氏の『逆説の世界史Ⅰ・古代エジプトと中華帝国の興廃』だった。

そして、この本のなかで私は、ついに「ネチェリケト」という言葉に出会ったのである。そこにはこう書いてあった。

初めてピラミッドを造った王は一般に「ジュセル」と呼ばれているが、これは王の在位より千年ものちに後世の人が名付けたとされている。このピラミッドを含む神聖な建物群を「ピラミッド複合体」と呼ぶが、そこに彫り込まれている王の名は「ネチェリケト」（意味は「神聖なる身体」）である。

つまりネチェリケトとは、古代エジプトの王の名前なのだ。

しかし、この王の人物像などはどうでもよい。ただその名前の響きだけが、私にとっての関心のすべてだった。私は即座に「これだ！」と思った。

こうして『ネチェリケト・聖なる身体』という本書のタイトルは成った。

この言葉を教えてくれた井沢氏には感謝しかない。その感謝が本物であることを証明するために、私が『逆説の日本史』も二六巻（プラス別巻五冊）までは読んでいるファンであることを記しておこう。文庫本が出たら、もちろん二七巻や二八巻も読むつもりである。

ちなみに、天才フランシス・ベーコンと一緒に、頭がいい人が書いた文章は、それを読んでいると、それだけで知的快感がもたらされる。井沢氏の本は、そうした快感を与えてくれる逸品の一つである。

民間防衛が教えること

スイスの啓蒙冊子

ヘルメティック・トリニティの各書の巻末に「付録」をつけ加えたいと思っている。これは『ディオニュソスの深層―世界の墓篇』でも行ったことであるが、本編とはまるで関わりのない、政治色が強いエッセイを書き残しておきたいのである。

最終的には、各書の付録を集成して「政治エッセイ集」のような一冊を編みたいと考えている。そのようなことをするのは、現代が、政治的に非常にシビアな時代に差しかかっているからである。私は、下手をすれば（＝今なにもしなければ）五年以内に、日本が中国の植民地と化するのではないかと考えている。

そのような危険性を、痛いぐらいに雄弁に教えてくれるのが、スイスの『民間防衛』という本である。冷戦時代のことだ。スイス政府は『民間防衛』という冊子を作製し、これを各家庭に配った。

それは、どうしても自国民に、防衛意識を高めて貰わなければならなかったからである。自国外のいかなる国にも追従しないため。他国に支配されないため。その上でスイスが、かの高名な「永世中立」を貫くために。

ところで、この『民間防衛』には、敵国による「武器を使わない情報戦」の手順が書かれている。そして自国民には、これに対抗するために、日々、防衛意識を高めることが求められている。

原書（原書房の日本語訳）は、やや雑然とした叙述スタイルとなっているが、これをケント・ギルバート氏がスッキリと要約してくれている。『儒教に支配された、中国人と韓国人の悲劇』という本の中においてだ。

次項で、この本からの引用を行いたい。

六つの段階

『民間防衛』によると、敵は次のような手段で、情報戦を進めると想定されている。

第一段階 工作員を政府中枢に送り込む。

第二段階 宣伝工作――メディアを掌握し、大衆の意識を操作する。

第三段階 教育現場に入り込み、国民の「国家意識」を破壊する。

第四意識 抵抗意識を徐々に破壊し、「平和」や「人類愛」をプロパガンダに利用する。

第五段階 テレビなど宣伝メディアを利用し、「自分で考える力」を国民から奪っていく。

第六段階 ターゲットの国の民衆が無抵抗で腑抜けになったとき、大量植民で国を乗っ取る。

日本の立場に立てば、これはもう、中国の対日本戦略そのものである。解説の必要もない気がするが、政府や学校からの洗脳に染まり切っている人たちには、敢えてそれが必要であろう。

第一段階 工作員を政府中枢に送り込む

かつては社会党や民主党という左翼政党が政府与党となったが、現在は、左翼化した自民党が、公明党と連立与党を組んでいる。

そして左翼議員であるということは、現在では「中国の工作員」と、ほぼイコールと考えてよい。それを証するかのように、公明党の政務調査会長は、帰化中国人である。公明党は中国側の利益誘導ばかりしている政党だ。

工作員として、とくに目につくのが、外務大臣の岩屋毅で、この男がやっていることは中国に日本を売ることではない。この男が工作員でないならば、一体誰を工作員と呼べばいいのか、というぐらいに中国に便宜をはかった言動を繰り返している。

もちろん、この男を大臣に任命し、更迭しようとしてもしない石破茂も同じようなものである。

第二段階 宣伝工作——メディアを掌握し、大衆の意識を操作する

活字メディアで言えば、これは「朝日新聞」が代表選手だろう。自分たちでも捏造と認めた南京大虐殺の偽ニュースによって、日本人の誇りを傷つけ、中国への償いを当たり前のこととした。

また、かつて「北朝鮮による日本人拉致など存在しない」と論陣を張ったが、それが存在すると発覚すると、その発覚に力を傾注した、安倍晋三元首相への活字攻撃を始めた。朝日新聞の「安倍的葬式はうちで出す」という言葉は有名だ。

それからこの新聞は、政治家が靖国神社を参拝すれば、誰も頼んでいないのに、わざわざ中国へそれを報告する。日本人にも、靖国参拝がいけないことのように報道する。朝日新聞とは一体どの国の新聞であるのか！ いや、もちろん中国、韓国、北朝鮮の新聞であるのだが。

第三段階 教育現場に入り込み、国民の「国家意識」を破壊する

これは日教組の教育方針を思い出せばいいと思うが、少しプライベートな話もおきたい。

中学生の娘が、学校の宿題を見せてくれた。番号どおりに点と点をつなげると、文字が出てくるとい

うゲームのような宿題だった。

そうして出てきた文字は「中国」。こんな課題を出す学校が、親中でないはずもない。

また、高校生の娘は、図書館から「差別撤廃」という文言が入ったタイトルの本を借りてきた。いかにも外国人差別をやめよう、と教えられたのが分かるチョイスである。

しかし、現在の日本は、日本人が納めた税金を、外国人が食い物にするという状態にある。その傾向をエスカレートするための「差別撤廃」であるならば、それはまさしく「国家意識の破壊」であろう。

第四意識 抵抗意識を徐々に破壊し、「平和」や「人類愛」をプロパガンダに利用する

日本の憲法は「周辺国（＝中国、韓国、北朝鮮）の温情を信じ、自分たちでは決して軍事的な防衛をしない」と宣誓している。

市民運動家（＝左翼活動家）は「この憲法が日本の平和を守ってきたのであり、それゆえ絶対に憲法改正などは許さない」と息巻いている。

しかし、やりかえさない相手には、いくらでも攻撃することが出来る。それが人間世界の真実であり、中国はまさに「やりかえさない日本」を求めているのである。

そのような日本をつくるための工作員こそ、市民活動家である。その活動家の一人でもある、社民党の福島瑞穂などは「もしも他国から攻撃を受けたなら、その時には、日本人は甘んじて死ねばいい」とすら言っていた。

実に左翼の言葉には、真実の愛も平和もありはしない。あるのは、従えば愚かであることを露呈する、美辞麗句の罠だけである。

第五段階 テレビなど宣伝メディアを利用し、「自分で考える力」を国民から奪っていく

日本の公共放送であるNHKは、実質中国のテレビ局である。民放のフジテレビやTBSは、実質韓国のテレビ局である。

NHKなど、中国に都合の悪いことは、決して報道しない。財務省デモも、これが左翼政党（＝中国の工作員）を倒す要因になることを知っているので、決して報道しない。それは報道しない権利の行使なのだという。

かつて一九七〇年代に放送された「シルクロード」というドキュメンタリーが、NHKと中国との最初の接触となったらしいが、それから五〇年経って、NHKはほとんど中国人に乗っ取られてしまった。だから、いざ選挙となれば、自分たちに都合の悪い候補者や政党には、全く触れようともしない。国民から「自分で政党を選ぶ力」を奪おうとしているのだ。

事実、老人たちは、NHKの情報操作によって、無残なほど「自分で政党を選ぶ力」を失っている。したがって選挙では、メディアが導くまま、自民党や民主党の候補者の名前を書くことになる。

第六段階 ターゲットの国の民衆が無抵抗で腑抜けになったとき、大量植民で国を乗っ取る

中国人は、自国経済の低迷もあって、今まさに、ぞくぞくと日本への移民を始めている。そして、岩屋毅を筆頭に、日本の工作員が、それを後押ししまくっている。

よって自民党と公明党がこのまま連立与党を続けられ、本当に日本は、早晚中国人であふれかえってしまうだろう。

しかも、この中国人が日本に帰化するのが、恐ろしく簡単になっている。その帰化制度を整備したのも、もちろん自公連立政府（＝工作員の巣窟）だ。

そして、帰化中国人たちは選挙権をも持つことになる。数にあかせて、中国に都合のいい候補者を当選させることになる。そのような候補者が国政に携わり、日本を中国に明け渡すことになる。これは当然の上にも当然の流れであろう。

この流れを、私たちは絶対に分断しなければならない。

——以上『民間防衛』のリストに則って、日本の現状と危機を描写してみた。

私たちに必要なのも、こうした情報戦争に立ち向かうための防衛意識であり、敵を敵と見定めるだけの気概である。

私ものはっきり言おう、中国と工作員は、私たち日本人の敵である。

ネチェリケト-聖なる身体 II

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
